

[原著論文]

社会科・観光学習を通して島の発展につながる人材育成 ——沖縄県石垣島の小学6年生への出前授業と 中学生観光シンポジウムを振り返って——

寺本 潔

要 約

筆者は、沖縄県にある石垣島の小学6年生を対象に授業を行った。石垣島は、観光で有名な島である。1960年代以来、島は観光地として発展してきた。観光の動向を題材に子どもたちが学習することは、島の未来を彼らが担う意味で重要である。筆者は、観光客の層に応じた観光商品を考える、ポジショニング・マップと呼ばれる教材を用いた。その結果、子どもたちの主体的・対話的な学習が実現できた。また、島の中学生を集めた観光シンポジウムを実現に導き、優れた意見を提案してもらった。

キーワード：観光振興、観光の動向、離島、観光学習

I はじめに

「汝の立つ所を深く掘れ、甘き泉あり」これは、「八重山研究の父」と称される喜捨場永珣（きしゃばえいじゅん、1885-1972）先生の言葉である。離島である石垣島や八重山地域の郷土研究にこそ見直すべき原資が眠っていることを次代に伝えている。地方創生の期待が高まる中、地域の資源を見出し観光や活性化につなぐ眼力が求められている。しかし、離島に居住する人々は、その隔絶性から、知らず知らずのうちに見方や視野が狭くなりがちになり、長年居住すればするほど「島には何もない」「あたり前」といった認識に陥りがちになる。一方で隔絶性は、よき特異性を醸し出す。その離島ならではの固有の魅力や価値に気付かせ、地域振興に関わろうとする人材を育成していくことは、地域に根ざした教育を大事にする学校の責務ではないだろうか。

このたび告示された次期学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」や「主体的・対話的で深い学び」が重要視されている。国際学力調査でも明らかになっているが、自己肯定感が低く、学習に興味を失いがちな我が国の子どもたちに対して、アクティブ・ラーニングへの転換が期

待されている（奈須；2017）。こうした中、琉球大学で教鞭を執る大島（2016）は、地域資源の適正な保全と活用を次世代に責任をもって継承していくことを理解する学習機会の創出が必要であると訴え、「観光の中での教育」「観光についての教育」「観光のための教育」の枠組みから構造化を試みている。これらの期待に応えるためにも筆者は、自ら出前授業を企画し、観光を題材とした学びを離島の子どもたちに勧めた。観光教育の意義に関しては、拙著『観光教育への招待』（2016）や寺本（2016）を参照して頂きたいが、成長著しい観光産業や地方創生につながる観光まちづくりへの参画を人材育成の観点から教育界も支えるべきではないだろうか。

ところで、研究対象地域として選定した沖縄県石垣市（人口4.9万人）は、3年前の新空港開港に伴い、過去最多の入境観光客（2016年は114万人）が来島している。中でもその地理的位置の優位性から、台湾や中国からの大型クルーズ船による訪日外国人客が毎週、千人程度、来島している。八重山地域における戦後のあゆみを振り返ってみても、今日のような観光客の激増は初めての出来事である。筆者は、2000年以降、石垣小学校の総合的学習（県指定）や八重山小学校社会科研究会の指導・助言に携わってきたため、経験知としても近年の島の観光動向に強い関心を抱いてきた。次世代が観光の動向を理解でき、地域振興に寄与できる人財として育ててほしいと願っている。

そこで、以下の3点を教育界に提示し、八重山小学校社会科研究会の方々と共に実践的に観光教育を推進してきた。

その3点とは、

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①八重山が大切に守ってきた自然と文化の資源を尊重できる子ども②観光にかかわる仕事の理解ができる子ども③観光客が豊かな時間を楽しめるために、自分は何ができるかを考える子ども |
|---|

である。ややもすれば、お国自慢に終始しがちであった従来のふるさと学習と異なり、観光客という相手目線に立った未来志向の学びを重視した。

資源をどう活かすか、観光客とどう向き合うのか、情報をどう受け止め発信するのか、観光の仕事への興味・関心をどう育てるか、観光ガイドや接遇体験、地元学、観光企画やルートづくりなどを通して、主体的に学びに向かう態度の育成こそ必要な資質となる。多角的な思考や判断力を駆使し、問題解決的な学習法を構築できれば、観光教育は地域振興の推進母体になれる。とりわけ、学校の教科・領域で観光を題材として最も導入しやすいのは、社会科と総合的学習さらに外国語活動である。

本研究は、寺本が過去5年間、沖縄県や高知県、北海道などの公立小学校において実施してきた出前授業を踏まえて提案するものである。例えば、小学校社会科において第4学年の3学期に「わたしたちの県のように」が定番の単元としてある。これは、観光単元として十分組みかえることが可能であり、観光地にある小学校では必須と確信している。

さらに、第5学年の社会科情報単元でも観光客が利用している各種情報（観光パンフレット

や観光協会が発信している Web 情報) を題材にできる。加えて、第6学年の3学期に「日本とつながりの深い外国」を学ばせる単元が配置されているが、その展開には児童が興味を持った外国1ヶ国を選んで調べて発表する学び方になっているものの、臨場感と切実感に欠ける傾向にあった。ここに観光で外国へ出かける想定学びを導入できないだろうか。あるいは、インバウンドで来沖している観光客とのかかわりを題材にしつつ、その国について学ぼうとする設定でもよい。6学年の1～2学期で扱う単元「日本の歴史」においても戦後の暮らしを学ぶ小単元で八重山地域の観光のあゆみを題材にすれば、児童が地元の戦後とポジティブに向き合える。今回、筆者が石垣市立大浜小学校6年学級において実施した授業はここに当たる。

Ⅱ 授業の実際

1 八重山観光を拓いた先人に学ぶ

6学年2クラスに計8時間の出前授業を行った。社会科では戦後の暮らしの向上を電化製品の普及やオリンピック開催などを題材として扱う単元がある。ここに地元の観光のあゆみを導入することで石垣島の発展と観光の動向をつかませたいと考えた。

冒頭で児童に1枚のモノクロ写真を提示した(写真1)。これは1955年に那覇-石垣間の初のテストフライトが行われた様子を伝える写真で、解説として次の文章が添えられている。当時の島の雰囲気生き生きと伝わる文章であるので、長文であるが、紹介したい。

「石垣の飛行場は日本軍の軍用飛行場だったため、滑走路は未舗装で草ぼうぼう。草刈りと滑走路を平坦にする作業を琉球政府の八重山地方庁に依頼。飛行場の入り口には、初の飛行機を歓迎するソテツで作った大きなアーチも出来上がった。米国政府の兵隊に頼んで吹き流しの代わりに発煙筒も手配した。さあ、本番の当日。飛行場は航空機を一目見ようと島の人たちでいっぱいだった。しかし到着時刻を過ぎても飛行機は見えない。電話はないし、連絡の取りよ



写真1 テストフライトの様子を伝える写真

(出典：『沖縄ツーリスト株式会社創立45周年記念誌』)

うがなかった。集まった人たちはイライラし、ざわめいた。2時間くらい待ただろうか。空の向こうに機影が見えた。待ちくたびれた住民の中から大きな歓声が上がった。もうすぐ着陸だ、と思いきや、今度は着陸する滑走路の端に2、3頭の水牛がうろうろしているではないか。宮里は米兵2人を連れてジープで駆けつけ牛を追い払ったり、石ころを片付けた後、急いで発煙筒を焚いた。担当の宮里はじめ関係者は胸を撫で下ろした。多くの招待客を乗せ、石垣に着いた時、飛行場は黒山の人だかり、大歓迎を受けた」（『沖縄ツーリスト株式会社創立45周年記念誌』2004年9月発行、p41～42.）。

このフライトを陰で支えていた二人の若者の内1人は、後に沖縄ツーリスト(株)を創業した東良恒（石垣市大浜出身）氏である。筆者が東氏の出身地を紹介した瞬間、驚きの声から児童から上がった。当校児童にとって、初めて知る先人であった。その後、石垣島の観光のあゆみ（年表・筆者作成）を提示した（表1）。この中で着目させたのは1962年の米原のヤシ林遊歩道整備である。この事業が八重山地域で行われた最初の公的な観光に関する事業ではないかと思われるからである。

八重山観光協会発行の『創立20周年記念誌』に掲載されている関係者による座談会記事（昭和59年10月25日収録）の中で石垣信亨（元観光協会会長）氏が「当時は牧野清さんが総務課長だったと記憶していますが、その頃から米原の野ヤシ林はめだまになるということで、牧野さんが市の職員を日曜日に動員し、野ヤシ林に細道を通し、米原の人々の協力を得て浜から砂を運んで山道に敷き、観光遊歩道をつくられました。最初のヤシ山道を通ったのは確かあの旅行クラブ一行（日本交通公社扱いの東京の旅行クラブ30名）だと思います。あの米原のヤシ林観光をした感じが今でも忘れられないという方もいらっしゃるよ。」（同書p35）との証言が見出せた。

出前授業では牧野元助役の顔写真も提示しながら、「川平湾や玉取崎もあるのに、牧野さんはどうして最初にヤシ林の遊歩道の整備をしたのでしょうか。」と問いかけてみた。すると、児童からは、本土には見られないヤシ林だったからではないか、観光客にとって珍しかったのではないかと、との類推が発せられるようになった。本土復帰や沖縄海洋博覧会、宣伝隊派遣なども年表から読みとらせ、関係者の努力の積み重ねによって今日の観光の発展につながっている事実に気付くように促した。児童たちは、地元出身の東さんや牧野さんが果たした成果に強い関心を寄せた。これらの事実は、これまで当地の社会科では教材として扱われていなかったため、授業を参観して頂いた教師に新鮮な驚きを与えたようである。

表1 児童に提示した石垣島の観光のあゆみを表した年表（寺本作成）

年	観光のできごと
1955年	那覇ー石垣間テストフライト
1956年	初の民間航空機1日1往復 八重山観光絵はがき作製

1962年	米原のヤシ林遊歩道整備（牧野清助役の発案）
1963年	八重山観光協会設立
1967年	南西航空 沖縄－石垣間就航
1973年	沖縄県本土復帰
1975年	沖縄海洋博覧会
1978年	小柳ルミ子「星の砂」ヒット記念公演
1980年	第1回ミス八重山選出
1981年	横浜、仙台などに向けて八重山観光宣伝隊派遣

2 出前授業として実施した社会科授業の指導案

延べ2日間にわたった出前授業の学習指導案を以下に提示したい。初日は、社会科歴史学習の視点から扱い、2日目は多角的な思考を伸ばすため客層に応じた旅行商品を考え合う課題を用意した。

石垣市大浜小学校 第6学年社会科（観光）学習指導案 授業者 寺本 潔

●授業の目標

6年社会科の小単元「戦後の復興とくらしの変化」は、電化製品の発明・普及やオリンピックを題材として国際化を扱うことが多いが、八重山地域の場合には航空路線の整備や観光による地域振興を扱うことでくらしの変化につなげる。観光で八重山を訪れる人のために作られた航空路線や島内観光バス、離島を巡る高速船など交通の発達や本土や外国から訪れる観光客のためのホテル建設や市街地整備、サービス産業の発展が石垣市の市民生活の向上に寄与している事実を知ることによって昭和（戦後）から平成までの日常生活の変化に気付くことができる。

初日の指導案（12月5日 6年1組1・2時間目 2組3・4時間目）授業者 寺本 潔

	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>1 モノクロの飛行機が写っている写真を見て、どんな光景を示す写真であるかを予想する。文章を読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ずいぶん前の石垣空港では？ ・ 飛行機の形が今と違う。 ・ 観光客が最初に石垣にやってきたときに島の人はどう思ったのだろうか？ を考え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1955年の旧石垣空港で撮影された写真であることを伝える。 ・ 写真の説明文を読みとらせる。 ・ 大浜出身の東良恒（沖縄観光業創業者）さんの顔写真も貼り出し、初めて沖縄－石垣間の航空路線を開いた業績も触れる。

展 開	<p>2 寺本が作成した「八重山観光のあゆみ」の年表を見て、航空路の整備に伴い、本土から遠い石垣島に観光客はお金をかけてやってきている。最初の石垣島観光は、助役だった牧野清さんが中心となり米原のヤシ林を整備した事実から、そのわけを考える。</p> <p>発問：石垣島には綺麗な風景がたくさんあるのに、どうして牧野さんは最初に米原のヤシ林の道路を整備して観光客を案内しようと考えたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヤシ林が日本にはないハワイみたいな風景だから ・ヤシの実をとってみたかったから？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光の魅力は、その土地にしかないもので自然が八重山の最大の魅力であったことに触れる。 ・牧野助役は観光客の目線に立って最初に米原のヤシ林を観光客に見せたかったことや市の職員や米原の人々の協力で浜から砂を運んで山道に敷いた努力に注目させる。
まとめ	<p>3 副読本『観光学習教材』（第10版）p. 40のグラフを見て、1972年から急激に県を訪れる観光客数が伸びていることを知る。</p> <p>4 観光地＋動詞の組み合わせで八重山観光の楽しみ方を考え、ノートに各自1つ書き出し班で自分の考えを紹介し合う。</p> <p>5 班の世話役の子どもが一押しのお楽しみ方を1案選択する。班の代表者が黒板の前に出てきて案を黒板に書き出す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山も沖縄ブームによって発展してきたことを確認する。 ・八重山地域の主な観光地名を列記する。 ・1案考えるように勧める。 ・友だちのアイデアを喜んで聞くためにも相づちと感嘆の声をあげるように勧める。

二日目の指導案（12月6日 5・6限2クラス合同）授業者 寺本 潔

●授業の目標

島の人々の暮らしをもっと向上させていくために、6種の観光客層に応じてこれからどのような観光振興のプランを考えたらいいか、班で考え合うことができる。

●本時の展開

	学習内容	指導上の留意点
導 入	<p>1 観光客を示した6つの客層のイラストを班ごとに二軸の思考ツールの上に配置し、客層に応じて観光情報や商品がつけられていることを知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・客層の想定を寺本が最初に解説することでイメージをつかませる。 ・客層に応じた理由をきちんと述べるように促す。
展 開	<p>2 班で考えた配置を発表する。</p> <p>3 観光パンフレットに盛り込まれた情報を調べ、八重山の観光の魅力が島ごとにテーマを決めて伝えられていることを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表紙の写真はどこか ・内容はどう工夫されているか 	<ul style="list-style-type: none"> ・冬場に東京から来島した観光客にとって八重山は持ち物が少なくて済むことに気付かせる。地図情報や散歩コース、イベント情報、問合せ先電話番号など観光客が移動に必要な情報がコンパクトに盛り込まれていることを知る。

終末	4 客のニーズに応じた八重山観光をもっと魅力的にするにはどうしたらいいか、世界水準の観光地になるためにすべきことを題にこれからの八重山観光を考え作文にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自然と文化を守りながら観光振興を図って行くことを大事にするように促す。 ・前日に使った観光地+動詞のイラストカードも参考につくった楽しみ方を書き出した表も貼り出す。
----	--	--

Ⅲ 観光客の客層に応じたポジショニング・マップ

石垣島を訪れる観光客を「熟年層」「ハネムーン客」「学生層」「若手ビジネスマン」「ファミリー」「海外ウェディング」の6種に分け、イラストカードでそれらを示し、縦軸に「のんびり滞在型」と「あちこち回る目的型」、横軸に旅行商品の「価格が高い」と「価格が低い」の二軸のシート上でカードを配置させる課題（ポジショニング・マップ）を児童に挑戦してもらった。ポジショニング・マップとは、観光商品の基礎的な性格を判断するベーシックな手法であり、①どのセグメント（客層）に②どんなニーズがあるのかを考え、その商品がどこに対応するのかを整理する（森下;2008）。客層の特性に応じて、理由を付して思考させるこの課題は、児童にとって観光客の客層という条件ごとで他者の視点に立てることから、主体的・対話的で深い学びにつなげる手法として小学生にも適していると筆者は判断した。対話で考え合うその場面と発表時の様子を写真に示そう（写真2～4）。グループで考え合う場面は、児童にとって興味深い内容であった。積極的に意見を述べ合う姿がいくつも見られた。実際の授業では、選んだ客層がお金持ちかそうでないか、カップルか、高齢者であるかなど多岐にわたる条件を



写真2 石垣島の観光のあゆみを調べる場面の板書

(大浜小6年学級 島の略地図を中心に、観光開発の先人である牧野・東両氏の顔写真が貼られている)



写真3 観光客の客層に応じた旅行商品を考える
ポジショニング・マップを考える児童



写真4 班ごとに考えた結果を発表する児童

考え合い、実に楽しげに話し合いながら、客層を書いたカードを適切な二軸シートの上に配置していった。こういった、観光客目線で思考させる学習場面は、児童を多角的な思考に誘うことができ、アクティブ・ラーニングの授業イメージにぴったりのシーンと考えられる。

Ⅳ 授業後の児童の作文

最後の授業で作文を書いてもらった。題は、「八重山にもっと観光客がやってくるためにできること」もしくは「八重山が世界水準の観光地になるために」である。後者の題はやや難しいかと思われたが、小学6年生である点と戦後の観光のあゆみを学習した後であったので、観光新時代を次世代として意識してほしいと思い設定した。意識の高さが伝わる作文例を3つ紹介したい。

作文1：「観光客に八重山をもっと楽しんでもらうには」

私が沖縄、八重山をもっとステキな観光地にするためにできることは、私たち島の人が自分たちの島のこともっと知ることだと思います。寺本先生に昨日、今日と授業をしてもらって自分の島のこと『全然分かっていないんだな。』と思いました。すきとおるような海、いろいろな動物がいる山など、生まれたときからあたりまえだったのに寺本さんが『これはあたりまえじゃないんだよ。』といていたのでびっくりしました。こんな小さな島にたくさんの観光客が来るのをふしぎに思っていたけど、ちょっとだけ理由が分かりました。もっと、私たちが島のことを知ればわるいところを改善して良いところをのばすことができれば、今よりもっと観光客がふえると思います。でも、それで、いろんなホテルの人がたりなくなって困るかもしれません。私たちがもっともっとがんばって、色んなことを学んでホテルの仕事につくとか、ホテルなどの施設をふやして観光客の人をいつでも自然な笑顔でむかえられるといいなと思いました。この授業で学んだことを、これからの観光業に生かせたらいいと思いました。(大浜小6年 結さんの作文)

作文2：「観光客に八重山を楽しんでもらうために」

私が八重山を楽しんでもらう為に必要だと思う事は、観光についての知識を高め、自分達の島の事を良く知る事が大切、という事が分かりました。石垣島には6大要素が結構あると思うし、もっと見つめてみると八重山が楽しくなるのかなー、とも感じました。私達にできることは、学生で観光についての事をたくさん学んでよく知り、どんな人が来ても、その観光客のタイプに合わせて、どういう風にどんな観光地が合うのかを考えられたらいいなと思いました。自分達の島でも案外分からない所や分かんない事も色々あって楽しかったです。晴れている日に合う観光地、雨の日に合う観光地をパッと思いつければ、カッコいいなと思います。ちなみに私が晴れている日にオススメの場所は、見るだけなら田舎、裏の方は自然もたくさんあるからいいと思うし、食べるなら新栄町や美崎町に行くといいと思います。お土産を買うなら、ユーグレナモールが最高だし、そこでは体験も色んな発見が出来ると思います。こういう風に石垣は見れば見るほど行きたくなるし、楽しい所だなと感じました。あと、石垣島各地の方言もくわしくなって、一回、方言でしゃべってみたいな、と感じました。(大浜小6年 佳蓮さんの作文)

作文3：「八重山観光を世界水準にするには」

八重山を世界水準にするためには和洋館なホテルを造った方がいいと思います。なぜなら外国人は和風の方がいいと思います。食べ物、きょうど料理を出したりできるし、日本人の人は洋風の方がいいと思う人もいるし、和風がいいと思う人もいるからその方が観光客がいっぱいいくと思います。もう一つは、工芸品などの体験ができる施設をもっと増やした方がいいと思います。外国の人は和風が好きだから昔のことを知り体験できると楽しいと思うし、できた物などを持ってかえれたらいいから友達から、またつながっていっぱい観光客が増えると思うからです。沖縄の文化をいかしたら世界水準になると思います。(大浜小6年 朱花さんの作文)

これら3つの作文は、観光の学び自体が子どもの積極性と広い視野を育てる格好のテーマであることを示唆している。しかしながら、3名の作文以外においては、文字数もやや少なく、課題意識が十分とは言えない児童も多かった。児童らにとって、観光で賑わう島は生まれてからの日常の出来事であり、改めて考え直すほどの関心を引く題材ではないのかもしれない。ここに、学習面の課題が横たわっている。

V 沖縄県石垣市における観光人材育成の必要性

1 子どもたちの浅い観光知と充実するハワイ州の観光教育

2015年と2016年、石垣市の2つの小学校で観光授業を担当させて頂いた。4年生に対しては、石垣市を訪れている114万人もの入域観光客数を示し、「多くの観光客は何を楽しみに石垣市を訪れているのだろうか？」を学習問題として提示した(寺本：2016)。そしてこの度、6年生には、戦後の八重山における観光のあゆみ(年表)を提示し先人の努力に気付かせた。観光という現象に島の子どもたちは敏感であると思いがちだが、意外にも子どもたちは観光客の目的や地域の観光情報について十分な知識を持っていなかった。まさに灯台もと暗しである。学校で観光客の特性や観光業の大切さについて、ほとんど教わっていないことに加え、島で起きている観光の激変を未だ他人事で捉えているかのようであった。

筆者は、沖縄県内の小学校において社会科や総合的学習の指導・助言を通して過去17年間関わってきたが、児童が保有する県内の自然環境や産業、歴史文化に関する知識が浅い点に驚いている。沖縄本島中城村の小学4年生に対して、世界文化遺産である中城城を扱った出前授業の際でも、学級の4割の子どもが城(グスク)を訪れたことがないという実態がそれを示している(寺本：2015)。

観光は、いわば他者の目で自県のよさを再認識できる格好の機会であり、単にお国自慢な感覚でなく、自県を客観視できる力が養われる。沖縄県の子どもたちに観光現象や観光産業に関する「観光知」が著しく不足している理由を何人かの校長に尋ねたところ、県内の小中学校で

は国語と算数・数学に著しく傾斜した学力向上に力が入れているため、観光のような新規の内容に関心を寄せる教師の余裕がなくなっているとの回答を得た。残念なことに、沖縄県においては、県発行の観光副読本『沖縄観光学習教材』（A4版62頁のカラー印刷、現在11版）が全4年生に配布されているものの、実態としては十分には活用されていない（寺本：2017b）。

筆者は、沖縄県における観光教育に対するある種の落胆と危機感も抱きつつ、文科省の科研費を使い、一昨年11月ハワイ州ホノルル市を訪問しツーリズム・オーソリティという機関で州の観光教育事情の聞き取り調査を行った。当地では『ハワイ州観光戦略計画2005～2015』が策定され、中高校段階から積極的に観光を学習内容に取り込み、原住民から受け継いだ“アロハ”の精神を初めとする5つの価値を専門家のワークショップも開きつつ、高校生に受け継がせる努力が実践されていた。ホテル業界や航空業界も州の観光人材育成に協賛し、ホスピタリティ研修とトラベル管理法の2種類の研修講座が17の高校で展開されている。さらに週末、金土曜日を活用しワイキキのホテルで高校生によるインターンシップも経験させたようである。加えて、中学校では急増する韓国人観光客との文化交流事業も開催したらしい。

沖縄県でも県のHPによれば『観光戦略計画』が策定されている。読んでみると観光人材育成やそのための教育界との連携についてはわずかの記述に留まり、具体的な教育実践につながる示唆は皆無であった。平成26・27・28年度に実施された「未来の産業人材育成事業」（沖縄県）はそうした必要感から始められた画期的な事業であると思われるが、受け入れ校において、1、2時間程度の事業担当者による出前授業が展開されているにとどまり、肝心の現場教師自身が産業人材の育成に対し、関心を抱き、積極的に産業人材育成のための授業づくりに向かうという流れには、残念ながら至っていない。

また、県内には観光系のコースを有した実業高校が二、三校あるだけで多くの普通高校では、SGH指定校などを除けば観光教育はあまり行われていない（寺本：2017a）。沖縄県内の実業系高校の教育成果が発表できる「産業まつり」に、例えば普通高校における観光の発表も行われる必要はないだろうか。観光は関連産業が広く、裾野が広い業界である。高く美しい富士山型の観光人材輩出を目指し、マーケティングにつながる精神“めんそーれー”の真髄と自然と文化へのリスペクトを柱とした沖縄県独自の観光人材育成戦略を早急に策定し、観光業界と教育界がスクラムを組んで着実な実行・実践に進むことが強く期待される。

2 石垣市の中学生を集めた観光教育のシンポジウム

平成29年7月13日（木）に石垣市市制施行70周年を記念した事業として「中学生がこれからの観光について考えるシンポジウム」（石垣市教育委員会主催）が市内在住の中学生490名を集めて市民会館大ホールにて開催された。実はこの企画は、筆者が立案したもので、市教育委員会を主管として応募して頂き、認可されたイベントになった。本事業にあたっては、教育

委員会の大浜譲指導主事の働きが大きく、登壇者の中学生や地元関係者の選定など、裏方で支えて頂いた。この場を借りて厚く感謝を申し上げたい。このシンポジウムで参加者に配布された要項(冊子)に「石垣市の中学3年生の皆さんへ」と題するメッセージを筆者は掲載してもらった。観光の学びがいかに大切かを訴える内容であるため、以下に紹介したい。

「◇“観光って、僕と関係ないよ” 『僕はプロ野球選手を目指して部活に励んでいるから、観光の仕事には興味がありません。』『わたしは、幼稚園の先生になりたいから、観光の学習っていらなと思います。』と無関心な人も多いことでしょう。でも、よく考えてみて下さい。めでたくあなたが、プロ野球選手になれたとしたら、冬場に沖縄や宮崎で球団がキャンプをするでしょう。そこには、あなたの球団ファンの方々が、他県から練習を見に観光客としてキャンプ地を訪れるかもしれません。プロ野球のキャンプ地に選ばれた市では、ファンの方々の宿泊費や食事代が必ず消費されます。野球観戦だけで帰る人は多くないので、ついでの観光地めぐりを楽しむはずです。すると、レンタカー店やガソリンスタンド、お土産店がうるおいます。球団にとってもファン層の多い少ないが、経営や人気のバロメーターにもなってくるのでたくさん来てほしいのではないのでしょうか。ですから、プロ野球選手を目指すあなたと観光とは関係があるのです。

一方、幼稚園の先生を目指すことは、たしかに観光と関係がないようですが、観光が盛んな市の幼稚園はその分税金からの収入が多いため、公共事業として立派な園舎が建設されるかもしれません。また、園児の親の職業も観光業が多いかもしれません。園外保育で港や公園、商店街、ホテル近くのビーチや前庭などを歩く際に、ゴミ一つ落ちていない整備された歩道や公園を園児と散歩できるだけでも気持ちがいいものです。観光ホテルのレストランで調理される食材も近くの畑や果樹園で栽培されるフレッシュなものなので、園児も生き生きと育つ作物畑をそばで見ながら散歩ができます。もし、観光が盛んでなくほかに目立った産業もない市だったら、税収は少なく、園舎は老朽化して商店街も活気なく、公園やビーチもゴミだらけかもしれないのです。畑や果樹園に魅力的な作物もなく、耕作放棄された畑になっているかもしれません。このように観光は直接的・間接的にもわたしたちの暮らしの様々な部分に影響を及ぼす業種なのです。◇観光のあゆみ 中学3年生の皆さんは、進学や自分の職業を考え始める時期でしょう。将来、何になりたいのか、どんな仕事につけるのかは、自分でもなかなか分からないものです。でも、少なくとも観光が盛んな石垣市に生まれたことを幸せに感じて下さい。そして、今日の南嶋の観光都市、石垣市は一夜にしてできた市ではないことを学んで下さい。港湾や空港整備、フェリーやバス、タクシー会社、ホテル開業、土産物出店等に努力された方々だけでなく、観光協会の方々や歴代のミス八重山による県外へのPR活動等、八重山観光のあゆみを知れば、認識が変わるでしょう。ホテルミヤヒラ前の公園にあるワシの像を見たことはありますか。港の整備の物語が分かりますよ。上海やキールン港から石垣港にやってくる大型クルーズ船を近くで見たことはありますか。これらは、いずれも観光を支える海の玄関に関するものです。◇マーケティング ユーグレナモールに出店している商店主の方は、毎日毎日、

売れるしくみ(マーケティング)を考えています。港や空港のチケットカウンターで働く人は、訪れたお客さんが安全で気持ちよく交通機関を利用してくれるように心配りをしています。ホテルで働いている人は、お客さんが石垣島滞在のよい思い出となるよう、笑顔を絶やさず素敵なおもてなしに気を配っています。観光客という他者の求め(ニーズとウォンツをきちんと区別しつつ)を常に意識して働いているのです。そのプロの仕事ぶりを職場体験実習で学んでいますか。

皆さんは、これまで市内で観光客に道を尋ねられたことはありますか? 『桃林寺ってどこにありますか?』『寺にあるお宝は何ですか?』との質問に答えられますか? 『この珍しい形の葉は何という名前の植物なんですか?』『珊瑚の石垣に囲まれた古民家にあるヒンブンとシーサーって、どんな役目があるのですか?』『どうして石垣島には多くの伝統的な舞踊が残っているのですか?』と聞かれたら、どう解説できますか? 人は尋ねられて、答えることができなかった瞬間に『自分は、実は知らなかった』ことに驚くのです。観光の学びを通して、石垣市という地域を見直して下さい。『ふるさとだから、わたし石垣大好き!』だけでは、遠方から訪れた観光客の満足感や期待には程遠いでしょう。これから高校生や大学生となって成長していく中で、石垣市以外の土地(県外や外国)にも積極的に旅をして下さい。他の土地と石垣市を比べることで一層、石垣市の特色が分かるからです。質の高い“観光市民”とは、観光客に優しく丁寧に対応できるだけでなく、自分も観光者として旅行を楽しむ資質を磨いているものです。観光の学びを通して自然や歴史・文化といった地域ブランドを磨くのは当然ですが、国語力や英語・中国語の会話力も大事です。伝統舞踊や沖縄ミュージックが好きな人は、色彩感や音楽感にも磨きをかけることが必要です。また、スポーツも観光です。クラブの対外試合で本島や県外に遠征する機会では、観光客の視線で訪れた土地を眺めている自分に気付くはず。さらに、ハーブの島、石垣島の食材や生き物に詳しいことも観光振興にメリット大です。ハーブ(香草)に詳しい専門家や自然保護系の専門家が多く島内にお住まいです。その方々に教を頂きつつ、健康資源や観光資源としてハーブや生き物を見つめなおすことをお勧めします。」このメッセージによって、どれだけ、地元の生徒の関心を引き寄せたか不明であるが、筆者の思いが綴られている。

当日は、自ら公開授業をステージ上で行い、基調講演に丁野朗(日本観光振興協会、東洋大学客員教授)氏を迎えることで、観光の学びがいかに当市の発展にとって大切かを立証しようと努めた。また、観光クイズ(7問)のうち5問を立案し、会場の中学生と楽しむしかけも用意した。中学生を交えたこの種の試みは、規模的にも内容的にもおそらく我が国初のシンポジウムではないかと感じている。翌日の地元新聞には一面に大きく報道されたので参照してもらいたい(八重山毎日新聞 第22383号)。

以下に登壇者を紹介しよう。選抜された4名の中学生と共に美ら花グループ代表取締役社長新盛一功氏、石垣市観光交流協会事務局局長の高倉大氏、観光教育を早期から訴えてこられた吉浜幸雅(那覇市小禄小)校長、それに基調講演を終えた丁野朗氏の8名を交えて50分間の討議

を行った。

シンポジウムで驚いた点は、中学生から飛び出した質の高い観光振興案であった。討議の観点は、石垣観光をさらに磨きをかけるとしたらどうすれば良いか、観光の人材育成として中学生に期待すること、年間124万人もの観光客が来島している現状で様々な問題も生じているが、それを中学生なりにどのように対応すべきか、の3点である。総合司会は筆者が務めた。大まかなシンポジウムの内容は、下記の通りである（鹿児島大学法文学部の小栗有子准教授による記録メモも参考にした）。長文にわたるため、中学生の意見を中心に精選して掲載したい。

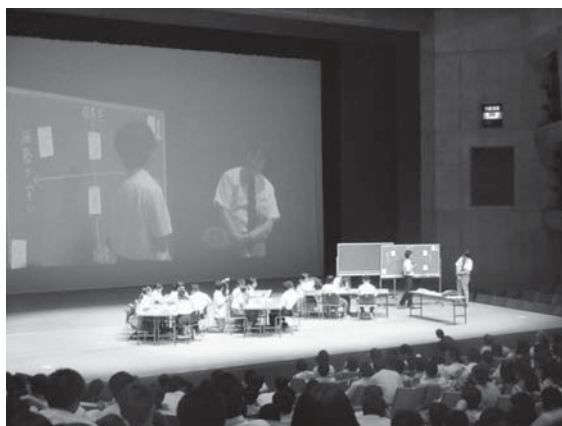


写真5 市民会館のステージ上で中3生徒と筆者による公開授業が実施（撮影は小栗有子氏による）

●「中学生がこれからの観光について考えるシンポジウム」会場：石垣市市民会館大ホール
司会 寺本潔 シンポジスト（敬称略）：丁野朗 新盛一功 吉浜幸雅 高倉大

中3生徒代表：田淵鈴夏 島尻和慶 宮良実成 天久球里 計8名

発言記録：「観光客にとって石垣市、石垣島の魅力は何か？ 何を磨けばもっと魅力的になるか（寺本）」に関して「生物多様性が魅力と思う。でも自然環境そのものの魅力に関して石垣島の人の認知度が低いと感じています。わたしはもっと知識を身につけ、その重要性を島の人たちに知らせていきたい（田淵）。」「サンゴにかこまれ世界有数のシュノーケルスポットがある。WiFiとパンフレットの整備をもっと進める（島尻）。」「海が魅力。エメラルドグリーンは日本100景に選ばれている。サンゴの白化が進行しているが、もっと観光客との相互理解と協力が必要（宮良）」。

次に、人材育成の大切さを筆者から投げかけた。「5年後、10年後。八重山、石垣島を訪れる観光客にとって、もう一度来たくなる思い出をつくってもらうためにも観光を支える主体が重要。中学3年生に何を期待できるか（中学3年生の4人には、これから高校生になるが、進学してから頑張っていきたいこと、観光をサポートするためにやっておきたいことは何か）（寺

本)」。この問いかけに対し、「相手を敬う気持ちを養ってもらいたい。旅に出るとごみのポイ捨てが目立つ。観光地にあるまじき行為だ。よい意味でも悪い意味でもどんどん旅に出て、いろんな経験、いろんな国の人と交流してください。海外に行くと日本ってどういう国なのがかってくる。歴史を知らないと会話が終わってしまう。地域のことを勉強していく。日常生活で学んでいってほしい（高倉）。」「語学力が大事ではないか。石垣島については、29年前に石垣に来る人は25万、今は150万人。当時は英語、中国語、韓国語、台湾語、全く必要なかったが、今は違う（新盛）。」といった意見が寄せられた。

シンポジウムの討議は、「ラムサール条約に登録された干潟の生物、環境の研究をわたしは続けてきました。海は命のゆりかご。環境省のレッドリストに登録された生き物もいる。それらをより多くの市民、に楽しく紹介することに携わっていきたい（田淵）。」「もっと石垣島について知り、何が悪くて、何がよいのかを知ってから大学に入り、石垣をアピールできる、アプリ開発をしたい。観光客が事前に調べることができ、自分の国に戻っても何度も確認できるから（島尻）。」「自分たちも積極的に参加できる活動をつくっていきたい。海をきれいにするための活動が白保でも行われている。自分たちがもっとできる、外国人に接していくためには、中国語や英語について詳しくなって活動を作っていきたい（宮良）。」「リセットと発信が鍵。自分の持っている考えをリセットして、観光客の立場に立つことで新しい発見になる。いろいろな疑問が出てくると思うので、アニメーションなどをつかって簡単に発信していけるといいかなと思います（天久）。」と展開していった。

「最後に魅力、観光客数を示すグラフに123万9千人とあります。他人事に考えているかもしれないけど、大変な数字です。この数字の重みをどれくらい理解してくれているのか、このシンポジウムで学んでほしい。これだけたくさんの客が来ると様々な問題が生じ始めているのではないか。どんな問題が生じ始めているのか。中学生の皆さんには、増えてくる諸問題を中学生なりに、こんなことなら解決できるのではないか（寺本）。」「環境と景観、なりわいが大事。岐阜県の高山市の話をしたい。高山市は年間500万人。海外から40万人の観光客で絶好調。しかし、30年後の高山はこのままつづくだろうか。重要建造文化財が残っているが、そこには多くの土産屋が並んでいるが、裏側には、本来の、酒や油、伝統工芸品を扱う店が営みをやっている。だから町が活気がある。それが単なる土産屋になりつつある。これは産業、生業が失われている兆候ではないか。そうした30年後の高山をとっても心配した市長が、高山を生み出した環境と生業を市の大きなビジョンで謳った。石垣も同じ。環境、景観を一度失うと取り戻すのが大変。もともと天然資源だけでなく、人の営みで生まれてきた環境がある。営みが弱くなってくるとその景観も失われる。環境と景観、それを支えているなりわいを残したい（丁野）。」「環境問題。道路渋滞が増えてきた。車の台数、レンタカーが増えた。交通事故も確実に増えている。表面化してきている。ごみ問題。観光客がふえることによってゴミがふえる。ごみのポイ捨てが多い。とくに地元の人、おじい。最近海がきたなくなったと嘆きつつ、自分は、たばこをポイ捨て。おじい、それが問題だよ。住んでいる人の意識を変える必要がある。さらに

治安。安心、安全なまちづくりを掲げているけど、住民が安心していけるまちづくりが大事。道路、ごみ、治安の問題をあげたい。(高倉)」

「大きなことにするには、自分たちが自主的に活動をしながら。たとえば、学校でポスターを作って家に貼る。小さいことを重ねると大きなことになる(宮良)。「ごみなどが捨てられる問題が多い。皆さんは、海の近くに捨てているごみを想像するけど、海の中にも。サンゴが白化、海流変わり、海が汚れている。海が汚れると、観光客も、行きたくなくなる。中学生も参加できるビーチクリーニングをしましょう(天久)。「石垣島の漂着ゴミは、観光客の国からきているんじゃない?ということは、そういう方々にゴミがきてますよ、と伝える。韓国語のポスターとか作るといいかもしれないですね(寺本)。「地域に住む動物が死においやられる。たとえば、観光客がきて、レンターがどういう生き物がいるかを知らずに、スピードを上げて、シロハラクイナが死に追いやられている。西表島でもイリオモテヤマネコが減少している。120万人のお客さん。今だんだん上がってきて、泊まる場所が必要になる。泊まる場所をつくるには、森林を切り拓きつづらないといけない。将来の石垣を考えると守らないといけないのに、かえってこわしてしまう(島尻)。「水不足と排水浄化が重要。バイオテクノロジーの力をつかって、改善、インフラと保存の調和ができる。将来実現できたら、力を加えずに、バイオ・ダイバシティにつながる(田淵)」などと討論が活発に交わされた。

以上のように、活発な意見交換がこのシンポジウムで実現できた。田淵さんの意見は、とりわけ国連で推進されている持続可能な開発目標(SDGs)が提示しているグローバルな人材育成の観点にもつながっている。自然環境の保全は、観光負荷を最小限に整えながら、サステイナブルな観光を目指さなくてはならないからである。

3 オペレーターやサポーターとしての観光者の育成

2020年東京オリンピックが近づくにつれ、外国や他県から多くの観光客が東京や日本各地にやってくることだろう。訪日外国人数は今年度3000万人に達しようとしている。インバウンド需要も3.8兆円もの稼ぎを打ち出している。大都市や著名な観光地だけでなく、これからは、地方でも訪日外国人や国内観光客との出会いが日常化するに違いない。国内の交流人口に関しても高速バスや北陸・北海道・長崎新幹線への延伸、LCC(格安航空会社)による増便等により、大都市圏を中心に観光地間の移動が活発化している。「道の駅」も千か所を超えている。旅行者として観光を楽しむだけでなく、来訪者に対する「おもてなし」の姿勢も介して地方に住む者が人生を豊かに彩る時代に入っている。

ところで、平成22年度に観光庁観光地域振興課で行われた観光地域づくり人材シンポジウムでは、観光地域づくりに必要とされる人材像の明確化が試みられた。そこでは、総合的に観光地域づくりをリードするまとめ役としてのリーダー、地域の観光資源を発掘して地域づくりに活用するための専門的知識を持って具体的な事業を企画・調整する人材としての企画・調整

者、さらに地域を訪れる観光客に現場で接する人材としてのオペレーターの3者を設定する案が出された。この内、筆者の専門である教育学の立場で最も注目したい対象者はオペレーターである。オペレーターの役割と機能は、「地域を訪れる観光客に現場で接する人材（ガイド、体験メニューインストラクター、観光案内所のスタッフなど）とされ、必要とされる知識・スキルでは、ホスピタリティ、コミュニケーション、リスクマネジメント、地域資源のマネジメント、語学、地域学・地元学の六つが挙げられている。筆者は、このオペレーターと共に地域社会で観光を支えるサポーターなる人材（多くは観光に関心を持つ一般市民）も必要ではないかと考えている。

つまり、教育学の視点から観光振興を考える上で欠かせない視点は、観光に携わる全ての方の人間形成であり、ホテル業や運輸、販売等の個別の観光業に就くための専門教育というよりも、一般市民でもあるオペレーターやサポーターが獲得しておくべき資質・能力を範疇に生涯学習としての観光教育も検討すべきと考えている。

日本は、数年前まで、インバウンド（外国からの来日観光）に関しては十分に発達しているとは言い難く、経済規模に比べて世界の中でも外国人観光客が少ない国に属してきた。しかし、円安や食、アニメから始まった日本ブームが追い風となり現在、東京・横浜・鎌倉、伊豆・箱根・富士山、京都・奈良、福岡、沖縄、北海道などには外国からも多くの観光客が押し寄せている。クールジャパンやカワイイ文化の人気も相俟って来日観光への熱いまなごしはさらに加速されるだろう。海外の観光地に比べ日本は極めて安全で清潔な街が広がっており、観光案内をはじめ、宿泊サービスや交通アクセス、お土産の質など基本的なインフラやサービスの点でも地方と都会の格差は大きく開いていない。そのため、外国人からも好感を持って受け入れられる観光地が全国各地に発達する可能性に富んでいる。

温泉観光地に展開する日本式旅館さえも、立派な観光資源になる。畳の間や床の間、生け花や小物、布団、風呂、割烹料理、仲居さん、和風の中庭でさえ日本文化を代表する観光資源として注目を浴びるだろう。こうした身近な観光資源の再発見と共に、今後私たちに求められる資質は、もてなしの精神で他者を受容できる「確かな観光者」である。観光地に住む住民も、国内外からやってくる観光客に対して当該地に関する地理・歴史・文化に関する知識とホスピタリティ精神を保有する必要がある。

石垣市をはじめ沖縄県は観光を取り巻く変化の最前線に位置づく県である。観光人材育成に教育界も一層の関心を抱く必要がある。

VI おわりに

観光の学びは、学習者にとってはポジティブ思考で物事を考える習慣を養う。そのため、創造性や寛容性、貢献意識に結びつけやすく、何と云っても旅行者と観光客という双方の目線に立てることから学習者に複眼的な思考を促せるメリットがある。近年、物見遊山的な「見る観

光」にとどまらず、ものづくりや多様な体験に特化した「コト観光」が人気であるため、周遊観光に多様な体験メニューが含まれたり、滞在型でも現地ならではの体験をじっくりと愉しめる配慮が不可欠となっている。その分、受け入れる側の知識の層を厚くし、観光客目線で迎えるホスピタリティが必要となっている。また、今後大きく伸びてくる観光の形態は、自然豊かな地域でソフトからハードな体験を満喫するアクティブ&アドベンチャートリップ、フードツーリズム、女性一人旅、社会貢献旅・エコツーリズム（リ spons ible・ツーリズム）、フォトジェニック旅行、アニメ・ツーリズムなど多様となりつつある。これらの観光ニーズに対応できる人材をどう育成していけるかが大きな課題となっている。

本稿で教育実践の舞台になった沖縄県石垣市では、1960年代より観光地として発展してきた。そのあゆみを島の子どもたちが知ることで、今後の島の発展を主体的に考えるきっかけができる。折しも市制70年の記念として日本で初めてとも言える学校教育と絡めた観光教育シンポジウムが本年7月に開催された。石垣市は目下、訪日外国人観光客や国内観光客も大きく伸びており、市街地中心部では新しい店舗の建設ラッシュに沸いている。また、団体客や個人客が八重山全体に訪れつつあり、マリンレジャーや宿泊業、飲食業の一層の拡大が期待されている。まさに、過去に見られないような八重山観光の新時代を迎えつつある。そうした中で、地元の小中高校生は近い将来の観光振興のための貴重な人材として成長してくれることが期待できよう。

謝辞

本出前授業が実現できたのは、大浜譲（石垣市教育委員会）、花城昌義（大浜小学校）の両先生のご尽力のおかげである。また、快く学級に受け入れて頂いた6年担任の先生方にも深く感謝申し上げたい。また、2016年4月に澤氏と共編著で出版した『観光教育への招待』ミネルヴァ書房に対し、本年6月に観光学術学会より2017年度教育・啓蒙著作賞を授与して頂いた。この場を借りて当学会審査委員会の皆さまに記してお礼を申し上げたい。なお、本研究に当たって文部科学省科研費（基盤研究C）「観光教育における観光教育の教材開発とカリキュラム立案」（研究代表者：寺本潔 課題番号15K01966）の一部を使用した。

参考文献

- 森下晶美編著（2008）：『観光マーケティング入門』同友館，165p.
深見聡（2014）：『ジオツーリズムとエコツーリズム』古今書院，197p.
Hawaii Tourism Authority（2015）：Vision 2015, Tourism Workforce Development Strategic Plan The Journey to Excellence. pp. 1～15.
寺本潔（2015）：自県の資源と世界遺産の価値に気付く小学校社会科・観光授業，『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第5号，pp. 33～44.

- 寺本潔ほか (2016): 小学校からの観光基礎教育のモデル授業構築に関する研究—沖縄県を事例に—。『玉川大学学術研究所紀要』第21号, pp. 1 ~ 18.
- 田本由美子・寺本潔 (2016): 『資源はっけん! 観光学習—沖縄県石垣市立石垣小学校4年の実践を中心にして—』日本離島センター平成27年度離島人材育成基金助成金報告書, pp. 1 ~ 32.
- 寺本潔 (2016): 沖縄県石垣島の資源を活かした地域観光学習の試み—小学校4年生を対象にして—。『地理学報告 (愛知教育大学地理学会)』第118号, pp. 99 ~ 104.
- 宍戸学・西恵里奈編 (2016): 『観光ビジネス実践ワークブック マイス・ビジネス編』横浜商科大学, pp. 1 ~ 49.
- 寺本潔・澤達大編著 (2016): 『観光教育への招待—社会科から地域人材育成まで—』ミネルヴァ書房, 165p.
- 大島順子 (2016): 観光の教育力の構造化に向けて。『観光科学 (琉球大学)』第8号, pp. 73 ~ 86.
- 福本賢太 (2017): 『観光甲子園』事業に関する考察。『日本観光ホスピタリティ教育学会』第10号, pp. 15 ~ 23.
- 中村正人 (2017): 『「ポスト爆買い」時代のインバウンド戦略—日本人が知らない外国人観光客の本音—』扶桑社, 255p.
- デービット・アトキンソン (2017): 『世界一訪れたい日本のつくりかた』東洋経済新聞社, 321p.
- 寺本潔 (2017a): 観光の教育力と教材開発による人材育成—那覇国際高校 (SGH) での出前授業を通して—。『論叢』(玉川大学教育学部紀要2016), pp. 101 ~ 116.
- 寺本潔 (2017b): 島の栽培植物と寺院の観光資源としての価値に着目した学び—沖縄県石垣市の小学校4年生への出前授業を通して—。『論叢』第16号 2017 (玉川大学教育学部紀要) pp. 37 ~ 61.
- 寺本潔 (2017c): 観光の学びで学力向上を。「琉球新報 (論壇)」2017年9月23日朝刊 紙面.
- 奈須正裕 (2017): 「何を知っているか」から「何ができるか」への学びの転換を。『Newえるふ』Vol. 14, ちゅうでん教育振興財団, pp. 1 ~ 4.

Thinking about the Development of the Island from Learning about Tourism: Through the Social Studies Delivery Service Class to the Sixth Grade Student in the Elementary School and Tourism Symposium for Junior High School Student

Kiyoshi TERAMOTO

I did a class targeting the sixth grade student of Ishigaki Island in Okinawa Prefecture. Ishigaki Island, which is famous island for sightseeing. Since 1960 years ago, the island has developed as a tourist spot.

It is important that children learn about movement of the sightseeing for the theme.

I used the subject called "Positioning-Map" to think about tourist-goods corresponding to the class of a sightseer. As the result, I could realize that positive attitude and dialog in learning class.

Keywords: tourism promotion, movement of the sightseein, distant island, learning of tourism